

寄稿 絵本作家と読者の懸け橋になって ～絵本作家講演会23年間の軌跡～

新得町図書館司書 菊地 幸一

「申し訳ありませんが、お願いしていた講演会は延期もしくは中止させていただきます。」コロナ禍のもと、講演を依頼した絵本作家や講演を楽しみにしていた皆様と、このような連絡を何度繰り返したことでしょう。1999年から始めた絵本作家を招いての講演会。パプルの頃は潤沢な予算がある図書館にお声掛けいただき、言葉は悪いですがそのおこぼれをいただくといったような状態でした。しかし、その後パプルが弾け、どこの図書館も一様に予算が削減され、それに伴いイベントも縮小せざるを得なくなり、いつのまにか潤沢な予算で開催してきた図書館からのお誘いも無くなりました。そうすると当然、今までの全ておまかせ状態から、一から自分たちでしなければなりません。今まで交渉に当たっていた方から「出版社経由だと講演料も高くなるし、時間もかかるから本人と直接交渉するのが一番いいよ。」とアドバイスをいただき、あとは勇気と誠意あるのみと自分に言い聞かせ、直接アタックすることにしました。と同時に予算的に1館での開催が難しくても、数館集まればできるのではないかと思い、普段から交流のあった数館に打診したところ、快く賛同していただき、まずは同管内の4館で開催することになりました。あとは誰が講演者と交渉し、段取りを進めていくか？ですが、なりゆき上、提案者である私が事務局の担当者ということになり、記念すべき4館での共同開催の初講演は、当時『パパは、ウルトラマン』『にゃーご』などで人気の絵本作家宮西達也氏をお願いすることになりました。

開催するにあたり私が決めたことは、講演者と直接交渉し、講演に関わる全ての条件等を提示した上で、ご承諾していただき開催することです。またお願いしようとする講演者が来道する情報を得たときには、どこにでも訪ね、直接お願いすることもあります。宮西さんも同様、幕別町に来町の際に直接お会いし、お引き受けいただきました。このようにして、宮西さんを筆頭に日本を代表する数々の絵本作家の方をお招きし、23年間に渡り講演会を開催してきました。

絵本はその名のとおり、絵で読む本です。たとえ字が読めない幼児でも、絵を見て様々な反応をしますし、両親や祖父母の懷に抱かれながらの読み聞かせは、子供にとって心地良く、何物にも代えがたい幸せなひとときの時間です。まさに絵本は赤ちゃんから高齢者まで楽しめる本なのです。

開催当初は、母子連れが多かった絵本作家講演会も、最近では父親の参加する姿も多く見られるようになりました。今でこそ、インターネット等で作者の詳細を知ることができますが、一昔前は好きな絵

本作家など、遠い雲の上の存在だったような気がします。そんな雲の上の存在と思っていた人が目の前でお話やサインをしてくれるのですから、ファンにとってはこの上ない喜びだと思います。「おかあさん、サインもらったよ!」と大事そうにお気に入りの絵本を抱えて嬉しそうなお子、子育ての中で擦り切れるほど読んだであろう絵本にサインをもらう年配の女性の姿などを見ていると、いつもほのぼのの気持ちになります。また作家にとっても、作品に込めた思いを語り、直接読者と交流し、様々な感想を得ることは貴重な機会となっています。

絵本作家講演会を長年続けてきたおかげで、次年度の事業を計画する年度末頃になると十勝管内はもとより道内各地の図書館や研修主催者の方たちから、紹介のオファーをいただくこともしばしばです。講演者同行して、数日間道内を巡ることも珍しくありません。利用者との懸け橋だけでなく、いろいろな地域の図書館職員の方々やボランティアの皆さんと交流をするのも楽しみであり、その人脈は自分の財産となっています。講演後のサイン会用絵本販売については、地元書店にお願いするのですが、書店のない町村が増え対応に苦慮することが多くなっています。対応策として、新得町内の書店に仕入れをお願いし、講演先では書店に代わって販売するようにしています。また売れた書籍のタイトル、冊数などはデータベース化して取り次ぎにお渡しし、マーケティングの資料として活用していただいています。

こうして参加者の喜びの声を励みに23年間続けてきた絵本作家講演会。今まで続けて来られたのも講演を引き受けていただいた絵本作家の皆様、ご来場いただいた皆様、そして各地の図書館職員、読み聞かせサークルなどのボランティアの皆様のおかげです。ここ2年はコロナ禍で中止せざるを得ない状況でしたが、徐々にイベントが復活し始めた現在、感染対策をしつつ今まで通り作家と読者の架け橋となれるように今しばらくはその役目を果たしたいと思います。

新得町図書館 司書

菊地 幸一 (きくち こういち)

1958年、札幌市生まれ。東京でサラリーマン生活を送った後、1994年4月より新得町図書館に司書として勤務。1999年より絵本作家講演会を開催。以後、道内外の講演会をプロデュースする一方、町文化・スポーツ振興基金運営委員として、様々なイベントを企画、運営をする。



連載 「中島児童会館で育った私の児童劇は 7」

「やまびこ座」とプロデュース公演した『森は生きている』

鈴木 喜三夫

前の連載「私に創る喜びを育んだ中島児童会館」から継続して、もうしばらく私の創った児童劇について書くことになった。(題名を変更)

1988年、中島公園の「こぐま座」に続いて2番目の子どものための劇場「やまびこ座」がオープン。それを待っていたかのように公演されたのが、世界でも有名な児童劇・マルシャークの『森は生きている』である。(下はその舞台写真)



その頃、児童文化を学び合う「北海道子どもの文化研究会」の中にいた「やまびこ座」の岩崎義純、「おしゃべりからず」というこども新聞を発行していた小川道子、それに私の三人が毎年、年末年始に児童劇を上演しようと意気投合。実現させた。

国内では東京の「俳優座」が初演、「仲間」が今も上演しているが、極寒の冬を知る北海道だからこそ描けることもあるだろう。

冬の森で「マツユキ草」を摘んでこいという王女の命令を聞いた継母が、みなしごを吹雪の中へ追出す。いつも森を愛しているみなしごのために、十二月の精たちが力を発揮するという幻想的な物語——演技力がある役者たちを集め、森の動物たちを演ずる子どもをオーディションで選び、歌を唄う精たちには合唱団員も加えた。

89年12月23～26日、90年1月5～7日の7ステージ、約2000以上の親子たちで大盛況。心配だった幼児たちは、2時間以上になる舞台にじっと集中した。世界の名作と言われる児童劇だからに違いない。翌年2回目は11ステージに増やし、一部キャストも変更した。これで3回目もいけると思った時、大きな問題が起こる。

制作を担当した小川道子(共育舎)から、みなしごに温かい目線をそそぐ老兵士(秋元博行)の

役を若い兵士(瀬田石和実)に代えたい。意地悪の継母親子が十二月の精たちに懲らしめのため犬になるところは残酷だから変えたい。という提案が出されたのだ。それはこの作品の主題を変えることになる。演出の私は強く反対した。

とくに罰として殺したり、つぶしたり、追放したりすることを「子どもに残酷」とする児童文学作品に対する問題はすでに論議済みのはず。子どもにもきちんと悪に対しての厳しさは伝えるべきと主張した。しかし制作は譲らなかつたのである。

残念ながら三者による『森は生きている』の3回目は無かつた。私は今でもこの『森は生きている』は、北海道内で上演された児童劇での質や動員で上位にあると信じている。(敬称略、つづく)

鈴木 喜三夫

(すずき きみお)

1931年・札幌生まれ。札幌北高から東京・玉川学園大学へ入学。56年中退してテレビ作家で活動後、札幌へ帰り59年専門劇団「さっぽろ」創設。86年フリー演出家、2009年「座・れら」を結成。現在に至る。94年北海道文化奨励賞、07年北海道文化賞受賞。04年「北海道演劇1945-2000」(北海道新聞社)上梓。



本の案内人「本シェルジュ」
厳選本の紹介
荒井さん編 ②

荒井 宏明 (あらい ひろあき)

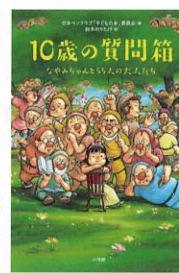
一般社団法人北海道ブックシェアリング代表理事
札幌大谷大学社会学部、東海大学現代教養センター講師
北海道子ども読書推進委員



『10歳の質問箱 なやみちゃんと55人の大人たち』

編集:日本ベンクラブ「子どもの本」委員会
出版社:小学館

執筆陣に連なる55人の名前を見ると「知っている有名人が多いな」と感じると思います。浅田次郎さんや、あさのあつこさんといった人気作家のほか、黒柳徹子さんや高須クリニックの高須克弥院長、映画監督の山本晋也さんと、ひとくせもふたくせもあるユニークな大人たちが一所懸命「子どもたちの悩み」に答えています。彼らもまた悩み、苦しみ、傷つきながら今日まで歩んできたのです。つまり「自分だけが悩んでいる」と感じているような問題でも「数え切れないくらいの人たちが抱え、受け止め、突破してきた問題」なのです。そして56番目の解答者は読書であるみなさんです。執筆陣の悩み解決のヒントとアドバイスに、さらにもうひとつの視点を加えてください。



『知られざる弥生ライフ』

著:譽田亜紀子
監修:大阪府立弥生文化博物館
出版社:誠堂新光社

武器が生み出され戦争が始まった時代とか、身分の上下が始まった時代とか、現代にまで続く人間の「負の部分」が生まれた時代などと言われる弥生時代ですが、裏を返せば日本人が新しい時代に足を踏み入れたのだともいえます。米づくりという新しい技術を得た弥生人は集落をつくり、それがムラとなり、ムラが集まってクニとなり覇権を競います。その勝者がご存知、卑弥呼が治める邪馬台国です。北海道には弥生時代にあたる時期がありません。寒冷なので米がとれなかつたのと、海産物が豊富にとれるので稲作を始める理由がなかつたのだからと考えられています。なのに、いまでは北海道の米はおいしさで全国トップクラスですから時代というのは不思議なものです。



『モノのなまえ事典』

著:杉村喜光
絵:大崎メグミ
出版社:ポプラ社

「ドラキュラマット」ってなんのことかわかりますか?「えへ、そんな怖そうなもの知らないよ」いえいえ、たいいていのが日常的に目に入っているものです。スーパーなどでバックのお刺身や肉の下に敷いてあるシートのことです。もともとは「ドリップ吸水シート」と呼ばれていたのが、商品名で呼ばれるようになり、そのまま定着しました。では、炭酸飲料のペットボトルの底のこぼこは何という名前でしょう?これはベタロイドといいます。ほかに売っている靴下の先を留めている金具が「ソクパス」だったり、ラーメン屋さんの湯切りの道具が「てぼ」だったり、聞いたこともないネーミングがたっぷり収められていて、ページをめくるとたびにワクワクします。



編集後記
ご寄稿いただいた新得町図書館の菊地さんは、幼いころ中島児童会館に通われていたそうで、連載をお願いしている鈴木喜三夫さんもしっかり。人との縁とは不思議ですね。73年の時を経て中島を支えてきた方々が、いろんな方面へ子ども文化の架け橋になっていること、それぞれの熱い思いがこのMASOBO通信に記されていくこと、幸せです。(柳本)

札幌市中島児童会館 tel 011-511-3397
札幌市こどもの劇場こぐま座 tel 011-512-6886
〒064-0931 札幌市中央区中島公園1番1号
(地下鉄南北線「中島公園駅」3番出口より徒歩1分)

お問い合わせ
お申し込み
MA・SO・BOに関する最新情報、
MA・SO・BO通信のバックナンバーは、
こぐま座のホームページからもご覧いただけます。
https://www.syaa.jp/sisetu/gekijou/kogumaza/index.html

